碩心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認可

神奈川　碩心会　発行

元年9月号（206号）

発行者　岳萃

編集者　岳愛

根岸　中村

現在会員数

月区	168名
9地区	258名
年子山地区	44名
元逗葉船地区	
（合計）	（468名）

奥伝許証の拝受に感激して

山の根支部　佐藤雅風

懐古すれば、去る昭和五十六年五月十三日、横瀬秀風様のお奨めで、山の根教場に於て三井岳瓏先生の温容に接しましたのは、七十三才の老齢で御座いました。初心者の私に対し岳瓏先生は、問合の取り方、音位の変化、余韻の引き方等に就いて微に入り、細に入り、懇切丁寧に御指導を賜りました。岳瓏先生の温情溢れる御指導に至極感動致しまして、唯今より岳瓏先生に深く師事し、奥伝許証の認許を拝受するまで学習に努めようと決意しました。

爾後、岳瓏先生の御指導を賜りながら学習に励みました結果、昭和五十七年四月一日付を以って、年齢七十四才で初段許証の認可を、同五十八年四月一日付を以って七十五才で初伝許証の認可を拝受、雅号は横瀬秀風様の御了承を得て秀の一字を賜り、秀泉と号しました。同六十年四月一日付を以って喜寿七十七才で中伝許証の認可を拝受感激し、秀山と号し、爾来、益々学習に励みました処、本年四月一日付を以って、待望の奥伝許証の認許を拝受仕り、年齢八十一才の老境に至り、積年の目的を達成出来ましたので感慨無量で誠に喜悦にたえない心境で御座います。岳瓏先生の御薫陶に対し、厚く御礼を申し上げると共に、今後も一層の御指導を賜るよう御願い申し上げ、雅号も岳瓏先生に御選定を賜り、雅風と号しました。

前述の許証受審合格達成の為、日夜詩文の暗誦に努めた結果、記憶力が蘇生し、老人性痴呆の防止に役立ち、尚健康の保持に留意致しましたので、長寿を保つことができました。是も総て横瀬秀風様のお将めで、碩心会に入会できた賜と衷心より感謝の意を表して居る次第でございます。

茲に奥伝許証の認許を拝受致しますと更に昇段への意欲が旺盛に湧き起り、老軀に鞭打って皆伝許証の認許拝受に向って、以前に勝る学習を重ねる決意を新たに致しました。愚考致しますと、先ず七段は八十三才、八段は八十五才、皆伝は米寿八十八才…誠に前途多難と存じますが、万難を排し念願達成に、邁進する覚悟でございます。以上、現在の心境を吐露致しまして擱筆致します。

第96回　全国吟道大会

とき・平成元年十月八日（日）

ところ・金沢市石川厚生年金会館

県本部35周年

記念吟道大会参加

とき・平成元年九月十七日（日）
ところ・横須賀市文化会館

合　吟　武野の晴月　矢嶋悦岳他
〃　爾霊山　千葉剱岳他
独　吟　静夜思　鈴木孝岳
〃　太平洋　三井岳瓏
合　吟　九月十三夜　沼田岳雷他
合吟コンクール　偶　成　村田澄枝他
〃　易水の送別　秋吉美代子他
構成吟　偶　成　松井正風
〃　舞　舟艇守の尺八　千葉香岳他
〃　〃　葉山八景　中村愛岳他
〃　〃　金沢八景　小林紫風他
独　吟　桂林荘雑詠　加藤岳相
〃　漫　述　諸生に示す　根岸岳萃
〃　俳句・塚も動け　松井岳洋

の後、愈々チビッ子達の吟がスタートした。どの吟も堂々と大人顔負けの吟を披露し、会場は惜しみない拍手につつまれた。

第二部青年の部が終り式典に移り、新田岳悠先生から「炎熱の折、この様に盛会で大変喜ばしい。二十一世紀に向って青少年の育成は大切である。心のふれ合いを大切にしたい」と。又長谷川岳聖先生は「二十一世紀に生き残れるかどうかは、青少年の双肩にかかって居るが、この分では大丈夫である」との御挨拶があった。

この後、第三部賛助吟詠と続き、子供達には負けられないと、大張切りの吟が続き、最後に、独吟、合吟の優秀者に賞状が贈られ、万才三唱で散会となった。

神・静地区

青少年吟道大会終る

岩崎恵岳

夏休み真只中の八月十三日、大船勤労福祉会館に於て、右会が開かれた。会場には早々と、元気な子供達が集り、定刻十時、舞台の幕が上った。国歌斉唱につゞき修礼

地区全員が力合せて

大船地区長　森田暁岳

大船地区は戸塚・松和・大船A・大船Bの四支部です。各所属よりの指示や、連絡の回覧等も地区長の仕事です。

三年に一度主催する地区温習会があります。会員が少ないので、全員が力を合せてやります。他地区の皆さんの御協力で無事に終らせることが出来ます。

年間の行事も一月から初吟会、三月は春の査定と次から次へと行事に追われて、六月の碩心会温習会や、他の会への出吟等、割当にも気を配って、全員が和で仲良く行きたいと思います。会員の少ない地区ですので、何とぞよろしくお願いします。

〃生とは〃

会長　根岸岳萃

以前読売新聞にのった記事を紹介しましょう。七十才以上のお年寄が死亡する前には、四人に一人が痴呆症状を見せ、八割以上の人が介護を必要とするなど、高齢者を取り巻く実態が、厚生省の調査で明らかになった。

この調査は、青森・茨城・新潟・高知・福岡の五県で、昭和六十二年四月一日～同十五日までに亡くなった七十才以上のお年寄全員、計二一二二人を対象に行われ、回答のあった二〇一七人の「死亡前の生活状況」をまとめたもの。

死亡場所では、病院が60・1％、次いで自宅34・9％、老人ホーム2・4％で「床についた」生活を送っており、一年以上寝たきりで息を引き取った人は26・6％で約四人に一人を数えた。

また「さっき食事をしたことを忘れた」「自分の名前や出生地さえ忘れる」といった重度の痴呆症状をみせた人は23・7％即ち約四人に一人で、こうした症状は、女性の方に多くみられた。

さらに、入浴・食事・排泄といった、日常生活で何らかの介護が必要になった人は、なんと84・5％にものぼった。

こうしたお年寄の介護役は「長男の嫁」31・1％「配偶者」22・2％の順。しかし介護役は男女によって大きく異なり、要介護老人が、男の場合は妻が圧倒的に多くて63・7％で、女性の場合の介護役は、長男の嫁が33・1％で最も多かった。なお厚生省の推計によると、わが国のお年寄人口（六十五才以上）の比率は、二〇〇〇年には16・3％二〇二〇年には23・6％と日本の人口の四人に一人が六十五才以上と、世界一の高齢国になるものとみられている。

この調査が必ずしも全国平均と一致しないかも知れないが、この痴呆防止には何か趣味に取り組むことが一番良いようですね。そこにゆくとわれわれが日頃精進している吟道は、多くの人と楽しく、先賢の遺された立派な詩歌に接し、お腹に力を入れて力一杯に吟ずる。いやだと思いながら度々行なわれる昇段審査で記憶する詩文、符付の頭の体操と、良いことばかり。

これからも〝楽しく〟〝仲良く〟益々お元気に吟道に精進されることを、ご期待致します。

「人の生や気なり。気竭くれば死す。気は以って養わざるべからず。」

頼山陽の代表的な著書

（日本政記）

神武天皇から後陽成天皇までの漢文体編年史。政治の隆盛などを記述して論評したもの。

（日本外史）

源平以後、徳川氏までの武家の興亡を、漢文で記述。史書としては必ずしも正確ではないともいわれるが、尊皇思想で一貫し、幕末の尊皇攘夷運動に与えた影響大といわれる。日本外史を今評価するとすれば、現代の人にいちばん合うのは、歴史的ロマンスを実にきれいに力強い文体で書いたという点にあるのではないかと思います。今は口語体で書くが、山陽の書いた文語体は見事で、生き生きと描写しており、我々がよく知る〝本能寺の変〟をみてみましょう。

光秀乃挙鞭東指。颯言曰。吾敵在本能寺矣。衆始知其反也。味爽囲本能寺。呼譟而入。弓銃交発。信長在臥内。驚起曰。反者誰。令蘭丸出視其旗幟。反報曰。惟任光秀也。

光秀すなわち鞭を挙げて東を指し、颯言して曰く。吾敵は本能寺にあり。衆はじめてその反を知るなり。味爽本能寺を囲む。呼譟して入る。弓銃交々発す。信長臥内にあり。驚き起きて曰く。反する者は誰ぞと。蘭丸をして出でて、その旗幟を視しむ。反り報じて曰く。惟任光秀なりと。

〝水明処〟は今なお加茂川のほとりにある。（日本外史・日本政記を書いた書斉〝山紫水明処〟は今なお加茂川のほとりにある。）

（日本楽府）

文政二年（一八二九）に出版され、日本史の挿話に題材をとった詩、六十六篇が載っている。代表的なものに〝静御前〟等がある。

（山陽の嫡子・又二郎）

父山陽の学者としての面を受け継ぎ、のちに東京大学の教授となった。

（その弟・三樹三郎）

鴨崖と号し、父山陽の改革者としての面を受けついだ。反対制運動の実行者として、安政の大獄に倒れた。山陽の死後二十七年めのことで、その八年後に明治維新は起った。三樹三郎は山陽の孫弟子にあたる吉田松蔭の墓の隣に葬られている。（愛岳記）

練吟メモ

過雁

○「九月十日」や「九月十三夜」は、むかしから詩吟の第一歩となる吟題である。とくに「九月十三夜」は、吟歴二十年を経たような練達の人も秋季大会などで吟ずることがある。口調がいいし、内容もすばらしいからであろう。でも、「九月十三夜」には、そんな上級の人達でも詩句の中に疑問に思うところが一か所ある。それは承句の「過雁」で、カガンと読むのか、それともカポン（以下。はカ行鼻濁音を表わす。この。はNHKで採用しており、当然吟詠界でも普及している）と読むのかが確信がもてないでいるという。もっともなことなので、粗略ながらその解説を試みてみたい。

○　九月十三夜

霜は軍営に満ちて　秋気清し

数行の過雁　月三更

右の軍営（グンエイ）のように、グと発音する場合と、過雁（カポン）のように、ポ（ンガ）と発音する場合と、どういうきまりがあるのだろうか。過雁の場合、雁はガンだからポンと読むのはいけないとする意見があるが、実はそうではなく、「ガ行（ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ）鼻音」の法則の存在が学会で指摘されている。

法則の㈠は、グンエイ（軍営）のように、語頭のガ行音は鼻音に発音しないで「グ」（破裂音という）で発音する。

※例　御衣（九月十日）ギョイと発音する。

法則の㈡は、語中のガ行音は、原則として鼻音で発音する。

※例　平原・ヘイポン（武野）三軍・サンポン（常盤孤）香魚・コウポョ（岐阜竹）

以上2法則があるが「原則には例外あり」で、やはり例外がある。たとえば、数字の五の発音や複合語には問題点がある。

※例　市議（市会議員）シギ～シポいずれでもよい。年月日・ネンガッピ～ネンポッピのいずれでもよい。詳記は省略する。

○結論となれば、日本は大別してガ行音とポ行音及びその両方が混ざる三つの方言の地域に区分される。ガ行とポ行は相半ばし、東京、京都、北海道は混ざる地区である。神奈川県はポの方言地区であるので問題の「過雁」の場合、本県本部で「過雁」の読みを「カポン」で統一し、「カガン」を許容すればよろしいことになる。同様に、岳風会総本部でも、日本全国が対象となるので原則の「カポン」に統一し、「カガン」を許容すれば問題は一挙に解決するものと思料される。

九月は敬老の月

偶然といいますか、今月号に八十一才の佐藤雅風さんから、又根岸会長の〝生とは〟の原稿をいただきました。

さて、碩心会の八十才以上の高齢者は何人いられるかと調べましたら二十名いられました。最高齢は明治33年生まれの上山口支部の鷲山祐風さん、次が34年生まれの堀内支部・Dの高梨誓岳さんと松和支部の武井桃山さんでした。

先週の稽古の日、途中ふと気がつくと、なんと高梨誓岳さんだけがめがねをかけずに教本をみているではありませんか。私を含めあと全員がめがねをかけているのに…。全員が驚きました。九段の審査に向って今一生懸命がんばっている誓岳さんです。

（移　籍）

390 高橋俊山　銀詠支部より真澄支部へ

（入　会）

540 角田美枝　葉山町一色二二〇四
（一色A）（電）〇四六八－七五－一〇四一

541 松井ユキ　逗子市逗子一－十－一四
（逗子A）（電）〇四六八－七一－一三六〇

（退　会）

110 行谷佳風（平　松）

361 清水光山（一色A）

343 植木孝山（堀内・D）

415 大貫高泉（唐木山）